

平成24年度大島賞選考結果報告

褒賞選考委員会
委員長 堀江重郎

大島賞は、若手研究者を対象に、将来の腎臓学研究のリーダーたりうる人材に光を当てることを目的に設けられており、毎年2名の42歳未満の研究者に授与されている。平成23年度の大島賞選考委員会は平成23年9月27日に行われた。今年度は7名の候補者の推薦があり、いずれの研究業績もきわめて質が高いものであった。褒賞選考委員会では、候補者の研究業績の質と広がり、および将来性などについて多岐にわたる議論を行った結果、以下の2名を大島賞に値するものとして推薦し、平成23年11月27日の理事会において承認された。

久米 真司 滋賀医科大学 内科学

「肥満・老化関連腎障害の発症機構ならびに新規治療標的の解明」

久米氏は、滋賀医科大学において、糖尿病や肥満、老化に関連した慢性腎臓病の病態解明を目的とした研究を遂行している。これまで、脂肪毒性に着目した肥満・糖尿病に伴う腎障害の分子機構を検討した結果を、2008年にJournal of American Society of Nephrology誌に報告し、また、カロリー制限に関連した抗老化分子Sirt1の腎臓における意義を2005年にFree Radical Biological & Medicine誌に、2006年にJournal of Biological Chemistry誌に報告している。更に2010年には、Sirt1-オートファジー経路の活性化による腎老化抑制に関する論文をJournal of Clinical Investigation誌に報告した。

これらの研究は、腎疾患の発症進展に関する栄養の重要性を明らかにし、研究の独創性・質の高さ・将来の治療応用への可能性という点において高く評価され、大島賞に値すると判断された。

西山 成 香川大学医学部 薬理学

「腎内レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系調節異常と病態への関与」

西山氏は、香川大学大学院医学研究科（薬理学）にて、腎循環・機能調節における生理活性物質の役割を探索できる実質臓器用微小透析法を独自に開発し、その後米国チュレーン大学へ留学し、腎尿細管糸球体フィードバック機構の伝達物質として細胞外ATPを同定し、さらには腎内レニン・アンジオテンシン系の独立した制御系を明らかにした。帰国後高血圧や各種腎障害に伴う腎内レニン・アンジオテンシン系の活性化および新しいアンジオテンシンIIの産生機序や、酸化ストレスなどを介した臓器障害分子メカニズムを証明してきた。またアルドステロンの腎障害の病態メカニズムについても世界に先駆けて報告した。

氏の主な研究分野は、レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系（RAAS）を中心とした腎臓の病態生理学的研究であり、これらの研究成果は質の高さ、独創性が高く評価されていること、さらに氏は既にこの分野の世界のリーダーの一人であることから大島賞に値すると判断された。